

質疑応答

古村えり子：私は炭鉱主婦協議会の研究をしております。最近、布施先生の著作を読み返して、気になったことがあります。それは、〈生活の論理〉を打ち出す上で最も重要な、女性の聞き取りがみられない点です。炭鉱労働者が一般労働者と決定的に違うのは、全ての生活必要物資が企業から供給されることによって、生活過程の中にまで階級的な対峙関係が入り込んでいることです。ここに、炭鉱主婦協議会の活動の階級的基盤があったと思うのです。〈生活の論理〉は、私たちの学生時代に出てきたもので、その当時、新しい論理だと言われていました。しかし、炭鉱主婦協議会の活動が実際の対峙関係の中から出てきたことが、十分には書かれていないというのが、私が本を読み返して感じたことです。

それとの関連になりますが、夕張も含めて、炭労は階級闘争でしたが、炭鉱主婦協議会は地域活動もしたんですね。社会福祉協議会や消費者協会、保育所も作ったのです。コミュニティの中心になったのは奥さんたちでした。その辺を、もう少し取り上げて欲しかった、もっと強調すべきではなかったか、と感じています。夕張については分かりませんが、赤平や三笠の炭鉱主婦協議会の奥さんには、行政に頼るのではなく、自分たちの手で学校を作っていこうとするような、活動的な方が多かったと思うんです。夕張の主婦会にも、そういう側面があったのではないのでしょうか？ 歴史を見ていく際には、その部分を見直す必要があるように思います。ただ、炭協の事務所が引越す時に、大切な資料群を燃やしてしまったので、残っているものをかき集めなければなりません。その辺にも、色々な問題があると思っています。

吉岡先生の地域経営のお話は参考になりました。でも、炭鉱が閉山となった場合、炭鉱遺産を守ることも大切ですが、産業を変えて生き還らせることも、やるべきことなのだと思います。閉山後、美唄では障がい者の方々を雇用する「光生舎」（社会福祉法人）の活動がみられるようになりました。夕張は派手に見えますが、産業を変える点で失敗したのかな、というのが感想です。

もう一点、布施先生の調査に関して、著作には載っていない調査票があるのでしょうか？ 女性の視点からの調査票や資料があれば、見てみたいと思うのですが、それは可能でしょうか？

吉岡：夕張と美唄が決定的に違うのは、炭鉱によってまちができたのか、それともまちがあって炭鉱ができたのか、という点です。明治期に開発された旧北炭系の夕張・三笠・歌志内は、炭鉱によってまちができた地域です。美唄は屯田兵の入植の後に炭鉱が開かれ、最盛期には農業と炭鉱が併存していましたが、炭鉱がなくなってまた元に戻ったという感覚なんですね。赤平・芦別・沼田・栗沢も同様です。

美唄は、今でも2万7千人が住んでいます。それぐらいの都市規模があれば、稼ぐチャンスも十分にあります。また、三菱は非常に面倒見が良く、「立つ鳥後を濁さず」という会社です。そして、経団連の大御所であった大槻文平さんが長く三菱美唄労務課にいた、思い入れの深い場所ですし、閉山時期も昭和40年代の中頃なので、まだまだ高度経済成長の余力があった。当時は、何かをやれば何となく当たったような時代です。今は定常社会や

凝縮社会と言われるように、縮んでいく社会ですから、一度、全部を組み替えなければなりません。

炭鉱によってまちができた所を、どうすれば良いのか——これは非常に難しい問題です。現実的には、2つの選択肢があるように思います。一つは「まち終い」をする。炭鉱によって町ができたのだから、炭鉱がなくなった以上やめましょうという選択肢です。実際、昭和40年代には炭鉱を閉める上でお得なキャンペーンとも言える「特別閉山交付金制度」があって、この時期に会社ぐるみで炭鉱をやめれば、残っている石炭を国が買い上げ退職金も何も心配することはなかった。ちなみに、その実施にあたったのが「石炭鉱業合理化事業団」、今の「新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)」です——我々はそれに対抗して、NPO「炭鉱(ヤマ)の記憶推進事業団」と名乗っています。国の合理化事業団が地域を壊したとすれば、市民の記憶推進事業団は地域を復活させようという意気込みです。「企業ぐるみ閉山」の時代には、羽幌炭鉱、釧路阿寒町の雄別炭鉱、三笠市・奔別地区の奔別炭鉱であったように、地区全体がなくなることは十分ありえた話です。一自治体の中いくつか炭鉱があった場合には、ある地区が消えるだけでした。しかし、今では自治体そのものが消えかねない時代となりました。「自治体をなくすことはないだろう」と、みんな思っていました。ついに夕張市が破綻してしまいました。まち終いが現実さをもって選択肢として出現しています。

もう一つは、その町が残っていることの価値を、自分たちが再認識すると同時に、「ここには残すべき価値がある」ということを、外にも認識してもらおうことでしょう。例えば、夕張であれば「石炭博物館」は北海道の産業を築いてきた証だから残した方が良く、三笠であれば北海道の近代はここからスタートしたのだからまちをなくしてはいけない…と

いうように、そうした価値を自分たちが再認識し、外にも発信することによって、その価値を受容してもらえ環境を創り出していく。そして、今まで通りの暮らしを維持するために収益のある産業を興さなければ、という拡大均衡型の発想ではなく、ある程度まで費用を切り詰めることによって「健康的で文化的な生活」よりも少し上の水準に均衡点を見つけるような、縮小再均衡型の発想に立つことです。この縮小均衡では、貨幣換算した均衡は縮小するのですが、「貧すれば鈍す」にならないために、定性的な価値観では十分な豊かさを持っているということが必要です。

その時、産炭地域では最低保障として頼りになるのが国家扶助である年金です。高齢者が人口の40%以上を占める自治体には、国から多額の現金給付が入ってきます。人口13,000人の三笠市の高齢化率は40%、5,200人の年金受給対象者がいます。特に坑内員は基準賃金が高いため、通常年金受給者より手厚い厚生年金が入りますから、総体的にはけっこうなボリュームです。市の会計規模100億円、その内50億円が地方交付税で、市税はわずか10億円の三笠市にも、100億円以上の現金給付が入ってきているはず。年金という基幹産業があって、これだけの現金収入があるまちが、なぜ立ちゆかないのか？それは、行政への依存によって非常に高い地域運営コストを支払っていることや、生きる気力や誇りを無くしてしまい高コスト体質になってしまっているからだと考えます。また、何もかも国や地域外に頼ってしまい、域外流出してしまっていることも一因です。

なぜ、こういうことになるのだろうか？「もう炭鉱がなくなったのだから、あなたたちは好きにして良いよ」という雰囲気、本人のやる気、張り合いをなくさせてしまっている。私は幌内で炭鉱遺産の活用を進めていますが、張り合いの出た人たちは、すごいパワーを発揮します。

例えば、三笠での活動の主力メンバーに、Iさんという82歳の元炭鉱マンがいます。この方は戦前の養成学校出で、現場を熟知した山元出身の職員です。炭鉱が閉山になる際に、「俺の人生はもう終わった」と日記を全てを焼いてしまった程ですが、縁あって我々の活動に参加するようになりました。三笠市幌内では、5年前から市民の手で炭鉱跡地に公園を作っていますが、数年前にIさんが公園での作業中に転んで肋骨にヒビが入ってしまいました。肋骨骨折は、炭鉱にはよくある災害で、痛いし息をするにも苦しいのですが、処置は湿布で冷やすぐらいしかできません。何とIさんは、翌日にはまた作業をしに来ているのです。大丈夫かと心配して聞くと、「忙しくて病院に行っている暇はない」。これほどまでにIさんの心を動かし情熱をかけるほどのものは、何なのか？「今まで炭鉱の話聞かれたこともないし話したくもなかった。でも、若い人たちが来て、こうやって自分の話を聞いてくれる」と言うのです。Iさんは専門用語を平気で使うし、高齢で滑舌も悪いので、正直言って何を話しているのか普通の人では良く分からないことが多いのです。でも、公園を訪れた人たちは「何を言っているのか分からないけれど…すごい」と言っています。その価値の源泉は、観光ガイドという経済的フレームによるものではなく、まさにその人の生き様なんです。「ここを知っているのは俺だけだ。自分の寿命はもう長くはないから、全てを伝えなければ」という思いが、人に響くですね。

Iさんは炭鉱についてですが、テーマは炭鉱でなくても良いのです。それぞれの経験や知恵・技能など持ち物を持ってきてくれる「場」を作るのが、行政や市民団体の仕事だと思うのです。そうした活動が出てくると、地域費用は低減し、同時に地域収益のプラスにもなる。もともと年金という固定的な社会給付があって、その上に国の交付税や工業出荷

額や農業粗生産額があります。年金と同様の100億円の現金を手に入れるには、工業出荷額・商業出荷額・農業粗生産では原材料費や仕入が控除された後の金額との比較になりますので、相当高い数値がないと達成できません。

しかし、地域の人たちが元気で生きていけるように、自分たちの経験した歴史の中から何らかのテーマで資源をもう一度発掘して、それを価値として発揮できる場とキッカケを作れば、何とか均衡させてゆく道筋があるのではないかと考え、その可能性を実践的に探っているところです。これを実現するためには、「なぜ、このまちは生き残る価値があるのか」ということを、明快に示していくことが前提になります。特に、炭鉱によってまちはできた地域では、そういう視点が欠かせないと思っています。

西城戸：青木先生、何かありますでしょうか？

青木：布施先生の調査票に関しては、私は実物を見ておりませんので、何とも言えませんが、古村先生の言われた女性の視点は、あってしかるべきだと思います。炭鉱主婦協議会の活動は、独立性を保って動いていた側面がありますが、やはり会社側がセーブしていた部分もあります。これは色々な場面にみられることです。先ほど話題になった戦後の文化活動、例えば文芸サークルなどは、比較的敏感な人たちが参加していましたが、主張のある作品を出すと、やはり叩かれてしまう。また、炭鉱の労働運動において、炭婦協の果たした役割には大きなものがあったと思いますが、生協活動などは、炭労の分配所から生協へという流れに組み込まれていたのでないでしょうか？

現在、夕張ではNPOが立ち上がり、さまざまな市民の動きもみられますが、一番問題な

のは、経済性を持っているか否かです。この点が未知数の場合が多くて、寄付などに依存している団体が多いのです。そういう意味では、雇用を全面に出して事業をやっていないと、なかなか地域再生には結びつかないのではないかと、それが正直な感想です。

また、企業性の違いもあるかもしれません。大夕張を経営していた三菱は、閉山の際にお金を残していきましたが、夕張市が全部使い切ってしまうと、それを上手に活用することはできなかった。北炭の場合、今回の財政破綻の原因となった負債もありますが、施設のほとんどを市が買い取って、余力は全くありませんでした。

古村：岩見沢の「三井グリーンランド」は、赤字になっても三井が残す方針だと聞きました。それは本当でしょうか？

青木：岩見沢の場合、支援というより、ある程度の補填のようです。あちらも経営が厳しくなっているので、三井が、ということにはならないと思います。

吉岡：三井鉱山そのものが、産業再生機構の

下で経営再建中ですから、厳しいでしょうね。

西城戸：長時間にわたって、本当にありがとうございました。我々SORDプロジェクトは、今年度から4年間の科研費プロジェクトなのですが、難しい側面も抱えています。というのは、やらなければならない課題が膨大にあって、それは先ほどの吉岡先生の言葉によれば、「現在もしくは未来の視点から過去を見直す」作業なのですが、参加メンバーの半数以上は地域社会学などの専攻ですから、やはり現在の夕張を見なくてはいけない部分もあります。一方では、冒頭に申し上げましたように、ただただ興味本位で騒いで、現在の夕張を調査だけして、何の貢献もしないわけにはいきません。我々としても、このプロジェクトが将来の夕張に役立つことができるのか、若干の不安も覚えつつも、その気持ちだけは忘れないようにやっつけようと思っております。お二人の先生方には、大変お忙しいところ、お越しいただきました。今回だけでなく、今後ともお力をお借りすることができれば、ご意見を賜ることができれば、と思います。本日はありがとうございました。